

本博士論文は、19世紀アメリカ文学の作家 Edgar Allan Poe の短編における「地名」や「国」などの「場所」(“place”)に注目して作品を論じている。それぞれの場所が持つ歴史的意味を探ることで、作品に秘められた人種に関わる問題を浮かび上がらせ、作家の政治的意識を探ることが本論の目的である。

第一章は“The System of Doctor Tarr and Professor Fether”(1845)を中心に、当時の雑誌に掲載されていたフランス革命をめぐる言説との影響関係を検討し、それにより Poe とアメリカ、フランスとの関係を再考している。本短編はフランス南部の精神病院で起こった患者達の反乱の顛末を描いるが、これはアメリカ南部における奴隷反乱への恐怖を表象していると言われている。そのため「フランス」という舞台設定が注目されることはほとんどなかった。しかし、作品の細部に注意を払えば患者達の反乱が「革命」のイメージで捉えられていることは明らかであり、患者達のリーダーである Maillard という人物の名前がバステューユ牢獄襲撃の先導者と同じであることからわかるように、患者達の反乱はフランス革命と重ねられている。また作品のタイトルの元となった“tar and feather”とはタールと羽をすり込むというアメリカ式のリンチを指す言葉であることもわかるように、本作品において「群衆」(“mob”)の暴力は重要な主題であるが、当時のアメリカ南部の雑誌で強調されたものこそフランス革命時の「群衆」の暴力性であった。さらにフランスの植民地であったハイチで起こった黒人奴隷を中心としたハイチ革命の影響もあり、南部の雑誌で描かれたフランス革命の群衆には黒人奴隷反乱の不安が投影されていた。“The System of Doctor Tarr and Professor Fether”が黒人奴隷反乱の恐怖を表象しつつフランスを舞台にしたのは、まさしくこのような文化的環境が存在していたからである。しかし、本作品の結末近くではアメリカ独立革命の表象も見出すことができ、フランス革命とアメリカ独立革命が重なり合う。実はフランス革命とアメリカ独立革命は相通ずる理念を掲げるなど非常に関係が深かったのだが、フランス革命の暴力的側面が明らかになるにつれてアメリカでは二つの革命の差異が強調されるようになった。しかし、Poe はフランス革命とアメリカ独立革命を重ね合うことで、両者の差異を消し去り、アメリカもフランス同様群衆によって支配された国家であると描こうとしている。同時にそれはフランスに愛された作家 Poe が、アメリカが抱いていたフランスへの嫌悪を内面化して

いた可能性を示唆している。

第二章は一章において考察しきれなかった Poe 自身のフランス革命に関する記述などを分析し、“The Psyche Zenobia (How to Write a Blackwood Article)” (1838) における黒人奴隷とアメリカ独立革命の問題を考察している。フィラデルフィアの女作家 Psyche Zenobia がエディンバラの時計塔の針で首を切断されてしまうが、その時計塔の穴は「フランス製の時計に見られるようなもの」と呼ばれている。これは雑文集“Pinakidia”で紹介された、フランス革命の恐怖政治時代に断頭台で処刑された詩人 André Chénier の詩の内容と結びつく。また、批評家によって関連性を指摘されている“The Pit and the Pendulum” (1842) には恐怖政治の中心となったジャコバン派へ言及したエピグラムがつけられている。これらのことから Zenobia の断頭の背後には、フランス革命における断頭台での処刑のイメージがある。第一章でも述べたように当時の南部においてフランス革命は黒人奴隷の問題と密接に結びついており、フランス革命は黒人奴隷に対する所有権を侵害するものとして捉えられていた。このような所有権に関わる不安は“The Psyche Zenobia (How to Write a Blackwood Article)”に広がるセクシャリティの不安へと接続する。黒人従者の Pompey が誤って Zenobia の股間に顔を突っ込み、Zenobia が激怒する場面は後年 rape complex と呼ばれようになるものの表出として考えられるが、rape complex は白人女性に対する所有権を黒人に奪われるかもしれないという白人男性の不安の裏返しであった。フランス革命を下敷きにした Zenobia の断頭の物語は、フランス革命が引き起こした南部白人男性の所有権喪失への不安を色濃く反映している。しかし、この作品は単に南部の不安を描き出すだけではない。Zenobia は首を切断される最中にフィラデルフィアでの Pompey との幸せな日々を思うが、当時のフィラデルフィアにおける人種間の緊張の高まりを想起するなら、そのような記憶が真実であるとは到底思えない。Zenobia の記憶と歴史的現実のずれは、万人の平等を謳いつつ奴隷制を廃止出来なかったアメリカ独立革命に対するアイロニーとなっている。

第三章は未完の長編“A Journal of Julius Rodman” (1840) と短編“A Tale of the Ragged Mountains” (1844) との関連性を探りながらアメリカ拡張主義に対する Poe の懷疑を考察している。“A Tale of the Ragged Mountains”

の Augustus Bedloe は、自分がその地の踏み込んだ“the first adventurer”であることを強調するが、これは原住民の存在を無視する行為である。また、Bedloe は西へ方向性を示しつつ過去のインドへとタイム・スリップし、Julius Rodman も西部の風景に東洋の表象を見出ししている。一九世紀のアメリカ拡張主義は西海岸と太平洋を越えてインドを終着地としていたことを考えるならば、西の果てに存在する東洋を志向する二つの物語はアメリカ拡張主義のイデオロギーを色濃く反映している。そのような物語がネイティブ・アメリカンとの衝突の問題へと接続するのは、ある種必然である。Rodman はネイティブ・アメリカンが野蛮で信用ならない人種であることを強調するが、実際にネイティブ・アメリカンを殺害した日の夜、良心の呵責に苛まれる。そこにアメリカ拡張主義に対する Poe の懐疑を垣間見ることが出来る。特に Bedloe が 1780 年のイギリス領インドで“Indian”によって殺されてしまうという“A Tale of the Ragged Mountains”のストーリーは、Poe がアメリカ拡張主義の未来をイギリス帝国主義の過去の中に見出していた可能性を示唆している。

ここまでの三章では、「フランス」、「フィラデルフィア」、「ヴァージニア」、「インド」といった作品中における場所の歴史的意味を探ってきた。第四章は前章までの内容を踏まえつつ“King Pest”（1835）から“The Masque of Red Death”（1842）へと至る Poe 文学における「疫病」の政治性について考察し、具体的地名への言及がない、いわば「どこでもない場所」（“nowhere”）を舞台にした作品に潜む歴史性を明らかにする。“King Pest”というタイトルそのものが明らかにしているように、この短編では「病」（“pest”）と「王」（“king”）という政治的権力が結び付けられている。政治的権力は境界線という形で可視化されているが、Legs と Tarpaulin は繰り返しその境界線を侵犯し法を無視する。King Pest は、どれほど自らの権威を主張しようと二人を支配することが出来ず、最終的に King Pest の“undivided empire”は崩壊してしまう。Legs がネイティブ・アメリカンに喩えられていることと King Pest がネイティブ・アメリカンの迫害者である Andrew Jackson の風刺であると言われていることを考えるならば、この短編は一方的に境界線を策定し法を押し付ける白人の支配に対する疑問を投げかけつつ、帝国としてのアメリカの崩壊を暗示している。一方、“The Masque of Red Death”においても、Prospero 達が閉じこもる修道院

内の“imperial suite”が「西」向きであることが拡張主義的イデオロギーを反映している。そこに侵入してくる赤子病はネイティヴ・アメリカンや黒人といった迫害された人種の表象である。“a thief in the night”に喩えられる赤子病によって Prospero の支配していたもの全てが奪われてしまうことは、白人による支配の行く末を暗示している。また、短編中に使われる “abroad”という語は、この物語がアメリカの外国に対する排他的な意識を内包していることを窺わせる。注目したいのは、黒人奴隷問題と関係が深かったフランス革命も周りの国に次々と“disorder”を引き起こす“plague”に喩えられていたことだ。人種問題をめぐる寓話として読めるこの短編の背後には、フランス革命という“plague”がアメリカに感染するかもしれないという不安を読み取ることが出来る。さらに、赤子病を追いかける Prospero はその過程で違う色に染まっていくが、絶命した時いかなる色に染まっていたのかははっきりとは描かれていない。空間的境界線を越えて侵入してきた赤子病は、人種の視覚的境界線である「色」の境界線をも曖昧にしてしまう。Poe 作品における「疫病」は白人大統領と迫害された人種という相反する表象を許容しながら、作家の政治的姿勢と深く結びついている。

Poe は歴史に背を向けひたすらに美のみを追求した作家であるとのイメージは根強い。しかし、本論文で扱った作品の分析を通して、場所が持つ歴史的意味と人種問題とを接続させながら創作する作家の姿が浮かび上がるだろう。